

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論 一番外編一：

“Japanese English”という発想(後編)

<http://eetimes.jp/ee/articles/1312/16/news011.html>

英語は米国英語/英国英語だけでなく、国の数だけあって、日本では「日本英語 (Japanese English)」がそれに当たります。皆さん、気後れすることなく、この日本英語を使い、英語の“ようにみえる”メッセージを極東の国から怒涛(どとう)のように発信しようではありませんか。

2013年12月16日 11時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

※“Japanese English”という発想(前編)は[こちら](#)から

英語教育の開始時期が、さらに早まる検討がされているようです([英語教育、小3へ前倒し 5、6年は正式教科に 文科省が方針](#))。

一方で、私は、この連載の第3回「[エンジニアが英語を放棄できない『重大で深刻な事情』](#)」で、ゴールデンウィークの全日を返上して、「英語がしゃべれないと全く仕事にならんという人は、就労人口の4%程度」という推定値を算出しております。また、しゃべらないまでも、日常において英語の読み書きが必要であるという人は、10%にも満たないと推測しています。

多分、文部科学省の人も分かっていると思うのですが、私は、これは「ニワトリとタマゴ」の関係だと思っているのです。

- (1) 英語を使いこなせない→グローバル展開できない
- (2) グローバル展開できていない→英語を使いこなす必要が出てこない

このような(1)←→(2)の負のループバックを破る最も簡単な方法は、一番立場の弱い人間を犠牲にすることです。つまり「文句を言えない子どもたち」です。

では、「文句を言える大人たち」は何をやっているのか。

保護者を除いて、大人の代表格といえば、政治家の皆さんということになるでしょうが、私は、彼らが国会答弁を英語でやるところを見たこと



画像はイメージです

がありません。そこまで言わなくとも、国連の演説や首脳会談の共同発表の場で、通訳を付けて日本語でスピーチをしているところをニュースで見た子どもたちが、

『これは、本当に英語をかんばんなければいけないな』

と思うのでしょうか？*1)

*1) [NHKのラジオ英語ニュース](#)では、コメントを求められた非英語圏の外国の政治家や官僚たちは、簡単な単語を一語ずつポツリポツリと区切りながらも、それでも自分の言葉でしゃべっています(感動で涙が出そうになります)。

「僕みたいな情けない大人にならないよう、しっかり学んで」と発言した大阪市の市長は、率直で誠実であったとも言えます。しかし、子どもたちは、『ならば、どうして、あなたは今からでも英語を勉強しないのですか?』と思うのではないのでしょうか。

「下手な英語をつかって海外に誤解されたら、国益を損なうから」という理由は、英語を勉強させられる子どもにとっては、単なる“言い訳”にしかありません。なぜなら、その理屈を押し通すのであれば、全ての日本国民は通訳を付けてグローバル展開をすればよい、という話になるからです。そもそも、子どもは、こういう言い方で逃げる大人を「ずるい」と看破する能力があります。

現在の英語教育のポリシーのままであれば、その開始の時期を、小学3年生にしようが、幼稚園にしようが、出産直後にしようが、全く無駄だろうことを私は「知っています」。

「思っている」ではありません。「知っている」のです。

「日本英語」とは?

こんにちは。江端智一です。今回は、[前回](#)に引き続き、私の提唱する「日本英語 (Japanese English)」の内容をご説明し、それを世界に発信していくことについて、考えてみたいと思います。

「日本英語」とは、どのようなものでしょうか。

「日本英語」の基本概念は、中学英語教科書のキーセンテンスをベースとしています。われわれが「英語」を使おうとする時、よりどころとなる「型」であるとも言えます。われわれは終生、このキーセンテンスの呪縛から逃れることができないように洗脳されていると言ってもよいかもしれませんが――例えば、「～～がある」→“There is ～～”であり、自分の意見を言うときは、なんであれ、“I think that”でスタートするなどが代表例ですが――それはそれでよいのです。

では、江端私案の「日本英語」指導要領の概要と、その理由を以下に述べます。

(1) 発音は、カタカナ発音で十分。発音記号の使用は廃止する
カタカナ英語発音で、十分通じる。通じなかったケースは、圧倒的に少ないから。

(2) 日本語と同じように[a,i,u,e,o]の母音をベースとして発音する。子音を判別するような試験は廃止する

日本語に子音を区別する文化・風習はない。日本人に聞こえない子音を履修するのは、時間の無駄であるから。

(3) イントネーションの位置、強弱は、どうでもよいものとする
イントネーションが異なっても、概ね通じるから。

(4) 単数形、複数形、“the”“a”のようなオブジェクトの指定子という考え方は、無視または省略してもよいものとする

日本はオブジェクトを無視またはあいまいにすることを、古来より継承している。これは文化として浸透しており、また社会においても重要な要素となっている。数を特定するオブジェクト指定子や複数形の考え方は、日本文化に合わないから。

(5) 自動詞に目的語を伴っても、また他動詞に不定詞を伴っても、どちらもよいものとする
英語の自動詞、他動詞の区別は、日本の動詞の使い方と親和性がなく、区別する明確な理由もない。また、区別しないで使っても、大抵の場合、理解してもらえるから。

(6) 時制は、現在、未来、過去の3種類だけでよいものとする。完了形の履修はオプションとする
。時制の一致も厳密に適用しないものとする

英語の時制の考え方は、日本語と根本的に異なるので、我が国の基本言語である日本語に合わせるのが合理的であるから。

(7) 使役の受動態の主体は、動詞の種類に関わらず、前置詞の区別を行わず、全て“by”で受けてもよいものとする

“to”“for”“toward”、その他いろいろなバリエーションがあるが(また、論理的な説明もできるらしいが)面倒であるから。

(8) 第4文型の2つの目的語は勿論、主語と目的語の位置が入れ替わってもよいものとする
このような使い方をしても、大抵の場合、理解してもらえるから。

(9) 副詞と、形容詞は区別して使う必要はないものとする。名詞を副詞で形容しても良いものとする。また、英単語は、ローマ字表記で記載してもよいものとする
意味が通じるケースの方が多いため。

(10) 可算名詞、不可算名詞は区別しないものとする
あー面倒くさいな。どーでもいいだろうがよー! そんなもん!!

あーこほん。最後に本音が漏れてしまいました。大変失礼致しました。

上記の具体例をひと言で言えば、日本人向けの「英語の規制緩和」「日本人向けの英文法の再構築」——まあ、はっきり言えば「英語の徹底的なルール無視」です。

文法や英単語の綴り、そして発音が正しいことは「望ましい」ですが、それによって「使われな

い英語」を教育し、英語を使えない日本人を大量生産したところで何の意味があるのでしょうか？

私は今回、文部科学省の「小学校学習指導要領」の[第4章 外国語活動](#)を読んでみたのですが、この内容が抽象的すぎて、全然分かりませんでした。これでは小学校の教師がかわいそうすぎるなあ、と思いました*2)。

*2)実際の現場の声(次女:小学5年生)もインタビューしましたが、いずれ別の機会に。

そして、[「中学校学習指導要領」第9節 外国語](#)の、特に「第2 各言語の目標及び内容等 2. 内容」については、——私はツンデレキャラではありませんが——『大丈夫なの？ バカなの？ 死ぬの？』と言いたくなりました。ぜひ、ご一読ください。上記の私の主張(「英語の規制(ルール緩和)」と、見事なほどの対称を成しています。

私が勤務している研究所は、日本で最も英語を必要とする職場の一つであると思いますが、上記の「中学校学習指導要領」に記載されている内容を実践できている研究員を、私は一人も知りません。



私なら、「学習指導要領」を以下のように記載します。

(1) 英語を『使う』ことを最重要のターゲットとする

画像はイメージです

(2) 半分くらい理解できて、半分くらいしゃべれて、半分くらい書ければ十分であり、完璧を目指してはならない

(3) 文法や単語は本質ではなく、副次的な手段であり、必ずしも正確である必要はない

(4) 理解できない部分については、ジェスチャー、板書、絵画、その他の手段を使うことを、併せて指導する

と、なぜ記載できないのでしょうか。……できないか。立場上。

□

私は根拠なく、このような主張をしている訳ではないのです。

まず、上記の江端私案の「日本英語」指導要領は、全て江端の海外出張や赴任での経験をベースにしております。その内容に、うそ偽りは一つもありません。

国内においても、私は、自分が作成したオープンソースのプログラムに関して、E-mailで世界中の人から多くのアドバイスをもらっています。

一度、中国人のエンジニアと情報交換をした時、送付していただいたプログラムのコメントやドキュメントが読めず困ったことがありました。中国語で書かれていたからです(漢字でしたけどね)。私は、「全部を英語に直してくれ」とはどうしても言い出せず、結局彼の善意を無にしてみました。今でも思うのですが、たとえそのコメントが、正確でなくとも英語で(あるいは英単語だけでも)書かれていたら、私はきっと読解できたと思うのです。

私がここから得た教訓は、「国際的な意思疎通においては、美しく正しい中国語や日本語よりも、デタラメでいいかげんでテキトーな英語の方がずっとマシ」と言う事実です。当たり前のことですが、言語というものは、その言語を理解できない限り、意味のない線図の羅列、または意味不明のノイズ音にすぎないのです。

“Japanese English”という発想

日本人がグローバルな場面に出ることが、世界的に本当に望まれていることなのかどうか、今でも私には分かりません。政治や教育に携わる人々は何度も「グローバル化」と言う言葉を繰り返しますが、誰も彼もがグローバル化に関わりたいのか疑問ですし、うそではないかとも思うこともあります。

しかし、最後にもう一度、私が申し上げたいのは、もし、あなたが本当に世界に出たいのであれば、あなたは既にそのコミュニケーション手段を持っている、という事実です。

それこそが、「日本英語」です。世界に対して胸をはって誇れる、日本の第二言語です。

今、われわれ日本人に本当に必要とされていることは、より高度な英語教育ではなく、

「Japanese Englishという発想」

そのものなのです。

日本英語で世界に発信しよう

「私たちは変わらなければならない」——というフレーズは聞き飽きました。

もうこのフレーズを使うのをやめましょう。私たちは、十分に努力してきたはずです。

パラダイムをシフトさせましょう。つまり、「私たち“以外”の者を、変えなければならない」——です。私たちがTOEICの問題集を購入するのではなく、外国の彼らに「How to use “Japanese English”」というタイトルの本を購入させて、私たちの日本英語を彼らに勉強させるのです。



画像はイメージです

そして、政府が行うべきグローバル化とは、文部科学省と外務省のタッグチームによる、この「日本英語」の海外への発信と宣言です。

何より、一番大切なことは、私たちのマインドセットです。皆さん、臆することなく、日本英語でしゃべり、日本英語で文章を書きましょう。

会話の最初や文章の最初は、以下のようになります。

This is not broken English, but Japanese English.
(これはブロークン英語ではありません。日本英語です)

最近、私は自分のホームページで、この日本英語を使った日記の掲載を開始しております。ぜひご一読ください(日記は[こちらから](#))驚き、あきれ、冷笑し、爆笑してやってください。そして、なにより、安心してください。皆さんが心配されるような「日本英語」に対する軽蔑や失笑は、この私が、最前線で一手に引き受けます。

私は、この日本英語を使って、ブログやツイッターで皆さんの思いを、世界に発信していただきたいのです。

このような声は、「大きい」あるいは「多い」方が往々にして「強い」ものです。非英語圏の中でも、特に日本という極東の国から、英語の“ように見える”メッセージが毎日怒涛(どとう)のように発信されている、という状況になれば、世界はいろいろな意味で我が国を無視することができなくなる……んじゃないかなー、と思っています。

□

次回、ついに私たちは、日本に帰ります。

私たちの意図とは別に、始まってしまい、そして広がってしまった海外共同プロジェクトという大風呂敷を、どのように短時間に完結にたたんで日本に逃げ帰るか、という観点から、あえて「帰国編」とは呼ばず、「撤収編」と銘打ち、お話ししたいと思います。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともいち) [@Tomoichi Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

